

東京を歩こう！

●大都市「東京」

●東京の歴史

●東京を歩こう！

①東京の玄関「東京駅」周辺

②政治の中心「霞ヶ関」

③江戸を感じる町「浅草・西国・上野」

新しい文化が生まれる町「秋葉原」

④アジアにぎやかな町「新宿」

古い物と新しい物が見られる町「池袋」

⑤最新ファッションの町「六本木」

東京の顔「東京タワー」

⑥若者が集まる町「原宿・渋谷」

⑦ウォーカーフロント「お台場」



大都市「東京」

日本の首都「東京」は、経済や政治や文化の中心です。約千二百万人、つまり、日本の人口の十パーセントが東京に住んでいます。周辺から東京の会社に通う人も大勢います。朝晩の電車は人でいっぱいです。電車に乗ると、高いビルやアパートや家がどこまでも続

いているのがわかるでしょう。美術館や劇場も多く、世界中の新しい情報や文化が集まる大都市です。

でも、東京にあるのは、新しいものだけではありません。真新しいビルの陰に、小さなお寺や日本庭園があることも珍しくないのです。ちよつと歴史を知って眺めてみれば、東京の別の顔が見えてくることでしょう。

新しいものが何でもあって、古いものにも出会える町。さあ、そんな東京を歩いてみませんか。



日本庭園（浜離宮）と高層ビル

これは、今から二百年以上前の話である。その頃、人を殺す、家を焼くなどの重い罪を犯した罪人は、死刑になったり、遠くの島に送られたりした。島に送られた罪人は、死ぬまでそこで暮らさなければならなかった。

京都に高瀬川という川があった。その川には舟に送られる罪人を乗せる高瀬舟が行ったり来たりしていた。罪人は、まず京都でこの舟に上られて、大阪まで運ばれるのである。

庄兵衛は、高瀬舟で罪人を運ぶ仕事をしていて、罪人が京都で舟に乗せられるとき、家族が一人だけ、一緒に舟に乗ることができた。罪人は、大阪に着くまで家族といろいろな話をする。これが、家族との最後の別れになる。「どうしてあんなことをしてしまったんだろう」「これから私はどうなるんだろう」と、罪人は泣きながら、家族といつまでも話し続けるのだった。

ある春の夕方のことである。庄兵衛は、喜助という三十歳ぐらいの男を舟に乗せた。やせて色の白い男だった。喜助は家族がいないので、一人で舟に乗った。

喜助の罪は、弟を殺したことだった。罪人は、たいてい舟の中で泣くが、喜助は違っ

た。喜助は、黙って静かに月を見ていた。顔は明るく、目はキラキラ光っている。庄兵衛がいなかったら、歌でも歌い出しそうだった。庄兵衛は不思議だった。

—— 変だな。この男は、他の罪人とは全然違う。こうして、こんなに明るい顔をしているんだろう。自分の弟を殺しても何も思わない悪人なのだろうか。いや、そんなに悪い人間には見えない——

庄兵衛は、喜助の横顔を見ながら、ずっと考えていた。しかし、考えれば考えるほど、わからなくなった。しばらく経って、とうとう庄兵衛は喜助に聞いた。

「喜助、おまえは何を考えているのか」

喜助は「はい」と答えて、座り直して庄兵衛の顔を見た。庄兵衛は言葉が続けた。

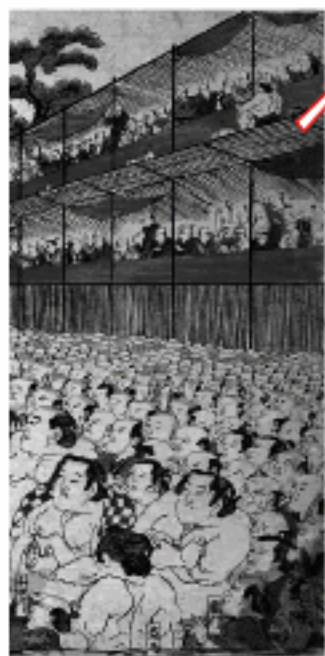
「私は、これまでたくさん罪人を舟に乗せたが、たいていの罪人は、夜中泣いて悲しがる。でも、おまえは島へ行くのが嫌ではないようだ。おまえは島へ行くことをどう思っているのだ？」

見本

見本

力士の動きや、髪かみの形かたち、行司ぎょうじの着物や帽子ぼうしを見ると、相撲すもうの歴史れきしが、とても古いことがわかります。千三百年せんさんひゃくねんぐらい前に書かれた「古事記」「日本書紀」という本ほんに、相撲すもうのことが書いてあります。

力士りきしが相撲すもうをすることを「相撲すもうを取る」と言いいます。昔むかしの人ひとたちは、神様かみさまの前まえで相撲すもうを取りました。台風たいふうや地震じしんや病気びょうきなどの悪いことわるいことが起おきないように、神様かみさまにお願ねがいするためでした。しかし、そのころの女性じょせいは、相撲すもうを見みることもでききませんでした。女性じょせいは神様かみさまの前まえに出でるべきではないと考かんがえられていたからです。今いまでは、女性じょせいも相撲すもうを見みることはでききますが、土俵どひょう上あがることはでききません。何年なんねんか前まえ、大阪府知事おさかふちじは、土俵どひょうで力士りきしに優勝ゆうしょうカップを渡わたすことができきませんでした。府知事ふちじが女性じょせいだったからです。



江戸時代えどじだい（一六〇三〜一八六八年）になると、相撲すもうを仕事しごとにする人ひとがでてきました。そのころの日本にほんは、三百さんひゃくぐらいの小さい国くにが集あまって、一つの国くにになっなっていました。その小さい国くにで一番いちばん地位ちゐが高い人ひとを「大名だいみょう」と言いいました。大名だいみょうは、力士りきしたちに高い給料きゅうりょうをあけて大切たいせつにしたそうです。

昔むかしは、寺てらの庭にわなどの広い場所ばしょで、相撲すもうを取とっていました。今いまのような、米俵こめの俵たわらを丸まるく置おく「土俵どひょう」ができたのは、江戸時代えどじだいの中頃なかつらからです。



かじんおむすもうとりか ぞ
勳進大相撲取組の図 <資料提供>日本相撲協会